
詩歌・小説の中のはきもの (第33回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

328 白足袋は爪先あまさず穿くものと母
がいひしを娘にきかせたり

野沢まり子

夏足袋を忘れて過ぎて二十年

石川桂郎

★足袋が廃れて、その履き方も忘れられた。明治の人たちは、靴下を“靴足袋”と呼んだが、足袋は西洋の靴下とは性格が少し違う。足袋は今のルームシューズの役割を持っていた。絶えず他人の目にさらされるから気の使い方にも靴下とは大差がある。飛行機の中でサービスに支給された靴下で機内のトイレに出入りする外国人がいるが、足袋は決してそんなふう履かれない。

329 高校が終わる頃には洋服のこともお化粧のことも髪形や爪のことも、ローズはあきらめてしまった。男の子との話し方から正しいまゆ毛の角度まで、すべてを教えてくれる雑誌の記事やアドバイスのコラムを読むこともやめた。彼女はかわいらしくなることや人気者になるという希望を捨て去り、唯一残った靴に対して、おしゃれを集中させた。靴を間違っただけ履くことなどありえない、とローズは理屈をつけた。靴には、上げたらいいか下げたらいいかかわからない襟や、捲くたほうがいいのか捲くらないほうがいいのかかわからない袖口などついていなかったし、見た目を際立たせたり台無しにしたりする宝石や髪飾りもついていなかった。

ジェニファー・ウェイナー

★『イン・ハー・シューズ』から。“彼女

の身になってみれば”その人のことがよく分るという意味の題名。でも、靴の選択だってそんなに簡単なことではない。いくら熱心にファッション雑誌などを読む努力をしても、努力だけでは適切な靴の選択ができるとは限らない。「人に与えられるものは、その人が内側に持っているものだけときままっているものなんだよ」というのがウェイナーが抱えていた大事なテーマだったという。靴そのものの良し悪しの判断はできるが、感性、センス、に自信のない私は、残念ながら、服装とのコーディネーションについてアドバイスできることはない。

330 作業用のきわめつけはなんといっても安全靴です。浅草寺の裏かたにバラックの店が並んでいるところがありますが、そんな古道具屋さんの1軒でスリッポンの、まるで昔のコッペパンのような、頑固なデザインの安全靴をみつけました。みつけてしまったらもうとまりません。とうとうそれを造っていた工場を捜しあて、もう廃版になっているにもかかわらず、赤やグレーの皮で造ってもらいました。

長谷川義太郎

★『がらくた雑貨店は夢宇宙』から。この人、いつの間にか世の中から消えてしまった商品を売っている。金太郎の腹掛けを手始めに、ブリキのオモチャ、セルロイドの筆箱、パイプベッドなどを業者に発注して造らせる。この安全靴の場合、爪先の鉄芯を取り除いた製品にしたという。ある靴のときは、失敗したが、神戸に何回も通ったという。彼の店は立派なセレクトショップ

である。

331 モードの帝国のなかに宙吊りになったまま、美しいイメージの空をあてどなく漂い続けるわたしたち。もしもいま履いている靴を脱ぎ捨てたなら、わたしたちはもう2度とあの懐かしい大地に降り立つことはできないにちがいない。軽くて薄いファッション・アイテムのなかにあって、靴はまだしもその重さと拘束感でいまだからだの重みを感じさせてくれるパーツである。そうしてわたしたちをかるうじて地にひきとどめてくれている靴は、もしかしてわたしたちの身体の最後のバニシング・ポイントなのかもしれない。それを脱ぎ捨てると、もはや身体が空無のなかに浮いて消えてゆく、最後の足がかり。もはやすでに名残の靴—わたしたちは脚のフェティッシュからなんとほるかなところへ来てしまったのだろう。

山田登世子

★『モードの帝国』から。男性自ら靴を脱ぎ捨てたのではないにもかかわらず、もう取り戻せないものがある。太陽王ルイ14世時代、踵の赤いハイヒールは男のものだった。服飾史に「ルイヒール」として痕跡のようにその名をとどめている。「王は美しい脚を見せつけんがため、太陽のごとく燃える緋色の衣裳を身につけてみずからバレエを踊る。宮廷貴族はすべて王に倣って舞踏を学び、脚の美を競わねばならない。純白の絹の靴下とヒールとは華麗なる王の身体に不可欠のコスチュームであり、それらはそのまま美と権力の衣裳であった」と山田は書いている。ヒールではなくて上げ底の特殊靴ならば、男たちの堅い需要に支えられて健在である。

332 靴の底抜けて雨の日こもりたる動坂
住ひの白秋なりき

筑紫二郎

「オレの靴は裏底が破れて、ボール紙が貼ってある。ぬれたら歩けるもんじゃな
いからね」と笑いながらおっしゃいました。

宮 柊二

★『忘瓦亭目録』から。北原白秋の靴である。コルクを埋めるところを安物の黄ボールで間にあわせた粗製の靴があった。雨の日、前を歩いて行く人の靴底の破れからボール紙がヒラヒラする。しばらくするとちぎれて道路に紙が張り付いている。昭和20年代は粗悪な靴が多かったから、見て見ぬふりをした。「武士の情け」「惻隱の情」「相見互い」、そんな言葉は高校生だって知っていたものである。白秋の「雨が降ります 雨が降る 遊びにゆきたし 傘はなし 紅緒の木履の 緒が切れた」はこの靴がモデルになっていると思考する。

333 この島に来て以来出しても出しても小石が靴の中に入り込んできてどうしようもなかった。砂利道を歩いていて小石が靴に入るのならば分かるけれども家の中に入れても小石がいつの間にかわたしの靴の中に入り込み右足の中指の爪と肉の間を引き裂こうとする。室内履きを脱いで調べてみるとすでに中指の爪は内出血でブドウ色に染まっていた。

多和田葉子

★『アルファベットの傷口』から。昔は舗装道路がなく泥道ばかりだったから、ズボンにハネは上がるし、靴には小石が入った。実は両方とも歩き癖によって、左足だけ、右足だけ、両足ともという特徴があった。他人を見るとズボンは綺麗だし、小石は入らない。それで人とは違う歩き方をしている「自分」に気付いたのである。それは小さな自己発見だった。

334 運ばれてきた盆の上には、クリュニイ美術館をすら顔色なからしむるに十分な、この上なく美しい形をしたスリッパの数々が揃っていた。灰色や黒や茶の裏皮のスリッパもあったし、白絹や薔薇色の縹子や、ビロオドやタフタのスリッパもあった。桜の枝で飾られた赤いスリッパもあり、また派手な羽色の鳥をあしらった灰色のスリッパもあった。踵は銀製、象牙製、あるいは黄金製であった。留金はきわめて高価な宝石で、この上なく奇怪かつ謎めいたデザインを示してい

た。リボンは巧緻な形に結ばれ、撚り合わされていた。ボタンはまことに美しく、たぶんボタン孔は、彼らとぴったり嵌り合うまで、もどかしい思いに堪えられまいと思われた。底はマレシャル香水を薫らせた柔らかい鞣皮であり、裏張りは、7月の花々の汁液を滲みこませた軽い羅紗であった。

オーブリ・ヴィンセント・ピアズレー

★『美神の館（澁澤龍彦訳）』から。日本の作家も、自分の想像力の働くかぎりの一番美しい靴について記述してくれないものだろうか。作家が書かないならば、画家に期待したい。豊かなイメージの溢れこぼれる中から美は生まれるのである。キリストにしろ、ブッダにしろ、誰もその人を見た者はいないが、能うかぎりの美しい想念の中から幾多の名画が生まれている。それともピアズレーの残した絵の中に、すでに色も鮮やかなスリッパや靴があるのであろうか。

335 お手伝いの期間は終わりに来ていた。

それはほどなく奥様から届けられた夏向きのスリッパにあらわだった。なから半年前、私が仕事初めにしっかりした色合いを選んで買った冬もののスリッパは、さんざ履かれてぐんなり型くずれし、今や暑苦しくくたびれている。届けられた新品のスリッパはさっぱり涼しげで軽い。

青木奈緒

★『うさぎの聞き耳』から。若い頃学校を回って求人に明け暮れていたころ、歩くのを見込まれて、会社から「テスト履き」の靴を与えられていた。それで毎日甲革の状態や底の減り具合をチェックしていたが、50歳過ぎてからは、余り自分の靴を見ることはなくなった。ある日突然、靴屋としては恥ずかしいほどに踵がすり減っていることに気づき、もうそんなに時間が経過しているのだと肅然としたことが何度かあった。「なから」はおおよその意。

336 強情な人だった。友情をもとめなが

らも孤独を恐れない人だった。しかしそれ以上に「うっかり人生がすぎてしまう」ことを自らに許さない人だった。そういう人だったからこそ、堅牢に積み上げられたヨーロッパ文明のただなかに、日本人がまだ外国へ出ることさえ困難だったあの時代に、ひとり分け入って行く勇気を持ち得たのだった。

私はいまもはっきりと彼女の魅力ある笑顔を思い出す。と同時に、石畳を蹴って歩くその意志的な靴音をあざやかに聞きとることができるのである。

関川夏央

★『豪雨の前兆』から。ある人の思想、生き方からその靴音を想像するというのが興味深い。昔軍人は足音高く歩くことを叩き込まれたという。見ようによっては威丈高に感じられた歩き方だった。病院内を移動する医者も、ガラガラと歩かないように心掛けていたという。大病院内の威勢のいい靴音は大抵医者か、外来の患者である国会議員のものである。

337 ゴム長靴、っていうのに今ひとつ気分が乗らないとき、人工素材やゴムの靴がとてもいいと思います。昔はそういった素材の靴はニセモノ風の感覚があって、履いているとちょっと恥ずかしかったものでしたけれど、近ごろのものは、作る側がニセモノとして考えてなく、面白い素材として商品化していますから、良い感じにでき上がっています。

大橋 歩

★『おしゃれ大好きノート』から。雨の日に履く靴には悩まされる。ひところ、郊外の新興住宅地に住む人が駅まで長靴を履いてきて駅でビジネスシューズに履きかえるという光景をよく目にしたものだ。今は道路が舗装されて長靴を必要としない。だが外勤の人などウォーターリパレント加工では長時間は保たない。なるほど、頭を切り替えさえすれば、引け目に思わずゴム靴はファッションブルに履けるのだ！と若い人の常識に最近やっと気付いた。

338 長時間座っている人は、ジョギングする人に比べて、土踏まずの損傷、つま先の骨折、足首の捻挫、靭帯の切断、膝腱の故障、さらには膝痛が92パーセントも少ないという事実が科学的調査によって立証されています。また車にはねられる確率も82パーセント、犬に噛まれる確率は71パーセント、消火栓や背の低い人間につまづく確率にいたっては89パーセントも低くなります。さらに、犬の糞を踏む可能性は78パーセント、鳩の糞の直撃を頭にうける可能性は83パーセント減りますから、ジョガーよりずっと清潔です。

ジョー・スピッカー

★『男のコラム マイク・ロイコ』の「走るか座るか」から。長時間座るクラブ・シカゴ代表のこの主張を覆して、ジョガーにその崇高な信念の維持向上をさせ、さらなる天国的な満足を与えるには、ジョギングシューズは相当大きな貢献をしなければならないと思われる。噛み付いてくる犬を避けるのは困難でも、せめて犬や鳩の糞よけ機能を搭載できれば、1日の大半膝小僧を抱えて座っているよりも走っている方がましだと反証できるであろう。

339 文明開化以降の日本人は、洋服を着て職場に通い、帰るときものに着がえてくつろいだ。谷中や千駄木、本郷の西片町辺りに多く残る和洋折衷住宅も、全体が和風なのに、家のご主人が客を迎える応接間だけ、玄関の脇に威儀を正して洋風である。…おばあさんたちのきものは、しゃきっと藍色木綿地の浴衣。三味線の師匠に、夏、稽古で汗をかくとさっと脱いですぐ水洗い、1日に何枚もとりかえると聞いたことがある。ブラジャーもガードルもつけなくて、きれいにまきつけ、ぐっと下のほうを帯でまとめる楽な着付け。下駄がよく似合う。

森あゆみ

★『路地の匂い町の音』から。私も好んで谷中辺りを歩くが、森によると「猫が多い」「せんべい屋が多い」「石屋と花屋が多い」

「井戸が多い」「稲荷が多い」のが特徴だという。下駄は多いとまでは言えないが、下駄の似合う雰囲気はたしかにある。ある履物がある人に似合うか否か、環境に左右されてしまうところが面白い。